０８／０３／１６　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：神に仕える人　３
聖書箇所：ローマ人への手紙　１章１３－１５節

主、神に仕える人であったパウロ、私たちが学ばなければならない模範がそこにありました。これまでに私たちは１：８－１２まで、その四つの特徴を見て来ました。彼は確かに、主を知っていました（８節)。主がどのようなお方でいったい何をなさるお方なのか、また、彼は主を愛する人でした（９節)。ですから、彼はすべてのことを主のために、心から誠心誠意行なっていました。なぜなら、そのことによって神が崇められるように、神のすばらしさが証されてほしい、神のすばらしさをより多くの人に知ってもらいたい、だから、彼はすべてのことを心から行なったのです。教会の働きだけでなく、宣教の働きだけでなく、日々の生活のすべてにおいて、それが彼の生き方、彼の人生でした。また、彼はすべてのことを福音宣教のために行ないました。彼は自らの生き方をもって人々にこのすばらしい救い主を証し続けたのです。それは一人でも多くの人がこの救いへと導かれるようにと願ったのです。その生き方はまさに、神を愛する人はどのような人なのか、どのように生きるべきなのか、そのことを教えてくれました。彼は同時に、兄弟を愛する人でした。主イエス･キリストを信じている兄弟を愛する人でした。９節の後半から１１節にそのことが記されていました。ですから、パウロはいつも彼らのことを覚え、彼らのために祈り続けていました。彼は何とかローマを訪問して彼らに会いたいと願いました。三つの理由がありました。一つは、彼らの信仰が成長するためです。同時に、自分自身の信仰も彼らによって励まされて成長したいと願いました。そして、一人でも多くのローマにいる人たちにこのキリストの福音を伝えたいと。私たちが兄弟姉妹を愛するというなら、私たちは兄弟姉妹の信仰の成長のために尽くすべきです。神はそのようにデザインされたのです。皆に異なった賜物があるというのは、あなたが主に忠実に歩むならあなたの歩みは人々にとって大きな祝福となるからです。私たちが信じるか信じないかではありません。神はそのようにしてあなたを特別に造り特別な賜物を与え、このような群れに置いてくださっているのです。そして四つ目に、彼は非常に謙虚な人であったということを見ました。プライドは働きにおいて邪魔をします。私たちは人と自分を比較してどちらが優れているかなど、そのような神が悲しまれるような生き方はもう終わったのです。私たちが自慢するのはただ一つ、こんな私を罪から救い出してくださったイエスだけです。パウロは使徒でありながら、ローマにいる兄弟姉妹の前に非常に謙虚に、私もあなたがたから学びたいと言いました。それは建前で言ったのではなく、彼自身が主が為しておられるみわざを見るとき大きな励ましを得ることができると知っていたからです。謙虚な人、仕える人、まさに、これが神に仕える人と呼ばれるにふさわしい人です。使徒でありながら常に学ぼうとしてパウロです。もう一つ、このみことばから教えられることは１３－１５節にあります。

☆主に仕える者、パウロの特徴
５．未信者を愛した人
１３－１５節**「兄弟たち。ぜひ知っておいていただきたい。私はあなたがたの中でも、ほかの国の人々の中で得たと同じように、いくらかの実を得ようと思って、何度もあなたがたのところに行こうとしたのですが、今なお妨げられているのです。:14 私は、ギリシヤ人にも未開人にも、知識のある人にも知識のない人にも、返さなければならない負債を負っています。:15 ですから、私としては、ローマにいるあなたがたにも、ぜひ福音を伝えたいのです。」**
（１）伝道への熱意をもっていた
私たちは先ず、このみことばを見て、彼自身が伝道に対する非常な熱意をもっていたことに気づきます。彼は一人でも多くの罪人が救われることを望んでいたのです。１３節に**「いくらかの実を得ようと」**とありますが、これは救われる人が起こされることを言っているのです。ですから、パウロは一人でも多くの罪人がこのすばらしい救いに与れるように、罪から救い出されて神の子どもとされることを望んでいたということが記されています。パウロがアグリッパ王の前に立ったとき、彼はこの王の前で証をします。使徒の働き２６章を見てください。パウロがアグリッパ王と話している様子が記されています。２６：２８－２９**「するとアグリッパはパウロに、「あなたは、わずかなことばで、私をキリスト者にしようとしている。」と言った。:29 パウロはこう答えた。「ことばが少なかろうと、多かろうと、私が神に願うことは、あなたばかりでなく、きょう私の話を聞いている人がみな、この鎖は別として、私のようになってくださることです。」**、パウロはアグリッパ王ももちろん、聞いている皆が同じように救いに与るようにと望んでいました。ですから、彼はあらゆる機会を用いてこのすばらしい救いを伝えようとしていたのです。
（２）福音を語り続けて行かなければならない義務をもっていた
また、そのような熱意を生み出した原動力、彼を奮い立たせていたことは何でしょう？１４節に**「返さ**

なければならない負債を負っています」とあります。つまり、パウロは伝道はしてもしなくてもどちらでもいいこととは思っていないのです。どうしても私がしなければいけないことだと言います。神から私に与えられた義務だというのです。当然しなければならない務めです。**「負債を負っています」**というのは返さなければならない責任がそこにあるからです。彼自身が言いたいことは、私はどうしてもこの地上にいる限り、キリストの福音を伝え続けて行かなければならない、ちょうど、負債を負った者が返済を続けなければいけないように、私はこのメッセージを語り続けて行かなければならないということです。Ｉコリント９：１６でこのように言います。**「というのは、私が福音を宣べ伝えても、それは私の誇りにはなりません。そのことは、私がどうしても、しなければならないことだからです。もし福音を宣べ伝えなかったら、私はわざわいに会います。」**と、厳しく責任の大きさを伝えるのです。私たちも電車の中で不審物を発見したときは連絡の義務があります。踏み切りで車が立ち往生していたら通報の義務があります。なぜなら、放っておくと大きな事故につながるからです。パウロはイエスを知らない人々を見たときに、彼らの永遠の住まいを考えたのです。イエス･キリストによって罪が赦されていなければ、間違いなく、その人は永遠の滅びへと向かっていると知っているゆえに、彼はそのことを警告する義務を感じたのです。人が信じるか信じないかは私たちの範疇ではありません。私たちは人を救うことはできません。しかし、パウロが分かっていたことは、私が伝えなければこの愛する人たちは間違いなく永遠の滅びへと向かってしまう、黙って見ていることはできないということでした。パウロはこのことをいやいやしていたのではないことは明らかです。彼は神からこのすばらしい務めをいただいた者として、感謝しながら、主を愛するゆえにそのことを喜んで為していたのです。

私たちクリスチャンにとって未信者を愛するということは、彼らにとって最も必要な救いを知らせることです。もちろん、私たちは彼らの必要を満たすために様々な物質的な援助をする必要が出て来るかもしれません。しかし、それ以上に大切なことは、彼らに救いのメッセージを伝えて行くことです。どんなに物を与えられたとしても、彼らのたましいが死んでしまって永遠の滅びに至るなら、いったい、それがどのようなものでしょう？神のみことばを通して人は神とともに永遠を過ごすか、それとも、その罪がさばかれて永遠の地獄で過ごすかのいずれかです。イエスによって罪赦されなければ永遠の滅びに至ると、パウロはそのことを知っていたのです。ですから、じっとしておれなかったのです。私たちも毎日、子どもたちの様子を見るとき、彼らが床につくとき、いつも祈ることは彼らが本当にイエスを信じて救われることです。私にできることは彼らために祈り続け、彼らに福音を伝え続けること、そして、自分自身ができれば彼らの前に模範をもってキリストのすばらしさを証し続けることです。彼らが救われることを望んでいるから、そのためには何でもしたいと思います。恐らく、皆さんもその通りでしょう。パウロも自分の家族だけではない、神が遣わしてくださるところどこであっても、そこにいるイエスを知らない人々にこの救いを伝えたいと願い、彼はそのことを実践し続けたのです。伝道は私がどうしてもしなければいけないことだと。皆さん、そのように考えてこのキリストの福音を伝え続けておられますか？自分の気が向いたときだけ、都合の良いときだけ、聞いてくれそうな人だけにとか、私たちに必要なことは、彼らがどこに向かっているのかをしっかり覚えて、彼らに必要なものはこの救いのメッセージである、イエス･キリストであるとしっかり確認して、このメッセージを伝え続けて行くことです。パウロはそのように行なったのです。だから、彼は主に仕える人だったのです。

彼はだれに対してそのような思いを抱いていたのでしょう？伝道の対象もここに記されています。彼は**「ギリシヤ人にも未開人にも、」**と言っています。面白いことは、この**「ギリシヤ人」**ということばのこの名詞に彼は冠詞をつけませんでした。というのは、ギリシャで生まれた人のことを指したのではなく、質のことを言っているのです。ギリシャ人のような人々ということができます。というのは、その後の１６節を見ると**「私は福音を恥とは思いません。福音は、ユダヤ人をはじめギリシヤ人にも、信じるすべての人にとって、救いを得させる神の力です。」**とあり、「ユダヤ人と異邦人」と言わずに「ユダヤ人とギリシャ人」ということばを使っているのです。ですから、ギリシャに生まれたギリシャ国籍の人間だけを指しているのではないことは明らかです。バークレーは「このギリシャ人ということばはギリシャの国の人々を意味してはいない。アレキサンダー大帝の制覇はギリシャ語とギリシャ思想を全世界にもたらしたばかりでなく、民族や生まれながらのギリシャ人という考え方を越えたものにした。ギリシャ人とはギリシャの文化とその精神を知っている者のことである。」と言っています。ギリシャ文化が広がって行きました。その影響を受けている人々、それを称して「ギリシャ人」と言うのです。そして、**「未開人」**とあります。バーバラスというギリシャ語を使うのですが、このことば「バーバー」という訳の分からない音節を繰り返す人です。元来のことばはその土地のことばを話さない人のことを意味したのです。バーバーバーバーと訳の分からないことを言っている人々、そのような意味です。バークレーは「未開人というのは、ギリシャ語の美しいしなやかな言語を話す人と比較して、醜い不調和な弁舌で語る者のことである。」と言っています。ですから、ギリシャ語を話していない人々、訳の分からないことを言っ

ている人々、それが日本語で**「未開人」**となったのです。ですから、言いたいことは、ギリシャの影響を受けた人々と受けていない人々、ギリシャ語を話す人々と話さない人々、彼はそのように二つに人々を分けたのです。また、バークレーは「ギリシャ人となるためにはある知性、精神、教養をもった者とならなければならなかった」と言います。ゆえに、**「知識のある人にも知識のない人にも」**と記されています。ギリシャ人は知識のある者で知識をもっていない人を未開人と呼んでいたのです。だから、パウロが言うことは、ギリシャの影響を受けたローマのあなたたちであろうと、そうでない人であろうと、私はすべての人々に、神が造られた人ならだれにでも、このキリストの福音を伝える責任を負っているということです。そのために彼はローマを訪問したいと思っていたのです。すごい熱意です。神が門戸を開いてくださるなら、どこに行ってもこのキリストの福音を伝えようとすると。私たちが出会う様々な人々に対して、何とか神が機会を備えてくださって彼らにキリストの福音を伝えると、そのような思いをもって彼は歩んでいたのです。まさに、彼はまだ神を知らない人々のことを心から愛する者だったのです。

ですから、私たちは五つのことを見てきました。パウロは、主を知っている人であり、主を愛する人であり、兄弟を愛する人であり、謙虚な人であり、そして、未信者を愛する人だったと。これが神に仕える者、パウロでした。彼はこのように生きることで主を証して主の栄光を現わし続けたのです。私たちが今考えなければいけないことは、では、私はこのように生きて主を喜ばせ主の栄光を現わしているかどうかです。パウロの生き方は今見て来ました。私たちはそのように生きているでしょうか？なぜ、それが大切か、私たちイエス・キリストによって救われた者は神に仕える者になった、それがクリスチャンです。パウロは確かに、ことば以上に生き方をもってキリストを証しました。なぜ、それが大切か、それは私たちの周りの人たちが、私たちの主が本物であるかどうかを見ているからです。残念なことに、多くの信仰者が口だけで生きていて、そこに生き方が伴っていない、口で語っていることをその行ないで否定してはいないかどうか？たとえば、私たちは「神は愛だ」と言います。でも、私たちがもし人を愛するどころか人に対して怒りをもっていたり、悪口を言ったりするなら、どのようにして私たちは神は愛だということを行ないによって示すことができるでしょう？未信者でも私たちが伝える神が愛の神だということは知っています。私たちはその神を信じていると言いながら、私たちがいがみ合っていたり、悪口を言い合っているならどうでしょう？私たちは口で神は罪を赦してくださると言いますが、それなのに私たちが人の罪を赦せないでいるならどうでしょう？私たちは人々にこのように言います。神は私たちの重荷を負ってくださる、だから、主に委ねたらよいと。それなのにいつまでも心配や不安から抜け出せない人がいるのです。今、私たちが考えなければいけないことは、私は行ないによって主を証する人かどうかということです。あなたはご自分の行ないをもって主を正しく証しておられるかどうかです。主に仕える者としてあなたは生き方をもってそのことを示しておられるかどうかです。皆さん、ここに私たちの問題があると思いませんか？キリストへの愛が成長するどころか冷えてしまって、かつての主に喜んで仕えたい、主のために生きて行きたいという熱意を失ってしまい、救われ生かされている目的も忘れて、ただ何となく日々を過ごしている信仰者が多くなっていると思いませんか？どうでしょう？救いへの、主の恵みへの感謝が薄れてはいませんか？もしかすると、あなたは今そのことで悩んでおられるかもしれません。なかなか自分が変わって来ない、自分の行ないが変わらない、いったいいつまで私はこのような状態だろう、なぜ、私はいつもこうなのだろうと…。ある人々はそのような中にあって、仕方ない、このような性格に生まれついたのだからとあきらめている人がいるかもしれません。でも、みことばが教えてくれていることは何でしょう？私たちがどう思うかではなく、みことばが私たちに教えることは「イエスを信じている人は必ず変わる」です。イエスを信じた人、主があなたを救ってくださったなら、その瞬間から神の働きが始まります。Ⅱコリント３：１８で**「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。」**と教えるように、私たちはイエス･キリストを信じたなら、聖霊なる神をいただいたなら、つまり、救われたなら私たちの行ないは変わって行くと言っているのです。みことばはそのように教えています。聖霊なる神は私たちをキリストに似た者に変えようとしています。その具体的な姿を見てみましょう。

◎聖霊なる神の働き

聖霊は私たちをどのような人に変えようとしているのでしょう？皆さん、よくご存じのガラテヤ人への手紙５：２２－２３を見てください。御霊の実のことです。**「しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、:23 柔和、自制です。このようなものを禁ずる律法はありません。」**とあります。ここで**「実」**と記されている名詞、これは単数形です。ということは、ここに出てくる九つの実は切り離すことはできないということです。一つのパッケージなのです。イエスを信じたあなたのうちにはこのようなものがすでに与えられているのです。最初に記されているのは**「愛」**です。アガペーの愛、犠牲的な愛をもって愛することです。イエスが私たちのためにご自分のいのちを捨ててくださったように、私たち

もそのような愛をもって愛するという、その愛です。エペソ５：１－２に**「ですから、愛されている子どもらしく、神にならう者となりなさい。」**と命令です。**「:2 また、愛のうちに歩みなさい。…」**、これも命令です。このように命令されているのです。神が私を愛してくださったその愛をもって愛するようにと。ある人は、この単数である御霊の実の初めに**「愛」**が記されているのは、残りの八つはすべて**「愛」**から出ている働きであると説明します。すなわち、御霊の実は**「愛」**だと言います。確かに、神への愛、人の愛が私たちの心を満たしているなら、これから見る八つの実は私たちのうちに顕著に現われて来ます。確かに、**「愛」**のあるところにはこのような様々なものが形となって現われて来ます。

順に見て行きましょう。

「愛」：アガペーの愛、救われたあなたは神があなたに与えてくださった愛をもって愛することができる者となるのです。

「喜び」：主によって祝されている事実から湧き上がってくる思いです。私のことを神は愛してくださっている、神は私にすばらしい約束をくださった、その神の真理が私の心の中に大きな喜びを湧き上がらせてくれるのです。自分の思い通りに物事が進むからではありません。神の前に正しく歩んで行くならこの喜びが私たちのうちに溢れて来ます。物がなくても様々な問題があっても、神さま感謝します、あなたが神だからと、物や環境によって得ることができない神の喜びを私たちは経験しながら歩んで行くのです。そのような者に私たちは変えられたのです。

「平安」：心が常に落ち着いています。イザヤ５７：２１には**「悪者どもには平安がない。」と私の神は仰せられる。」**とあります。簡単なことです。平安がある、心が本当に落ち着いている、心が騒いでいないのは、あなたが神の前を正しく歩んでいるからです。イエスは言われました。ヨハネ１４：２７**「わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます。わたしがあなたがたに与えるのは、世が与えるのとは違います。あなたがたは心を騒がしてはなりません。恐れてはなりません。」**、心が落ち着いている、神への感謝がある、そのような状態に私たちは神から変えられ続けているのです。

「寛容」：忍耐とも訳せることばです。人の悪を怒らないでそれを受け入れるのです。ローマ９：２２にはこのように記されています。**「ですが、もし神が、怒りを示してご自分の力を知らせようと望んでおられるのに、その滅ぼされるべき怒りの器を、豊かな寛容をもって忍耐してくださったとしたら、どうでしょうか。」**、神のあなたに対する忍耐、寛容を覚えなさい、神はどれほどあなたのことを気長く我慢強く待ってくださっていることか、もし、神が私たちに対して短気であったら私たちは滅ぼされています。神は寛容と忍耐をもって私たちの悪を赦そうとしてくだっているのです。

「親切」：相手の身になってその人のために何かをすることです。思いやりをもってその人のために尽くすことです。この**「親切」**ということばはローマ２：４では「慈愛」と訳されており（**「それとも、神の慈愛があなたを悔い改めに導くことも知らないで、その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじているのですか。」**）、同じローマ１１：２２では「いつくしみ」と訳されています（**「見てごらんなさい。神のいつくしみときびしさを。倒れた者の上にあるのは、きびしさです。あなたの上にあるのは、神のいつくしみです。ただし、あなたがそのいつくしみの中にとどまっていればであって、そうでなければ、あなたも切り落とされるのです。」**）、思いやりをもった人へとなって行くのです。人々を助けて行こうとするのです。

「善意」：良い心、善良な心です。好意的に相手の言動などをとらえるのです。これの反対は悪意です。人を憎んだり害を加えようとする、その人のうちにはそのような思いがないのです。たとえ、人が自分に害を加えたとしても、その人に正しいことをし、良い心をもって接して行こうとします。

「誠実」：信仰、忠実、真実と訳されていることばです。つまり、**「誠実」**というのは私利私欲を交えないで真心をもって人や物事に接して行くのです。信頼できる人です。なぜなら、その人は誠実に忠実に働きを為して行くからです。

「柔和」：穏やかな人です。復讐や仕返しなど考えていない、へりくだった人です。Ⅱテモテ２：２５には**「反対する人たちを柔和な心で訓戒しなさい。もしかすると、神は彼らに悔い改めの心を与えて真理を悟らせてくださるでしょう。」**とあり、テトス３：２にも**「また、だれをもそしらず、争わず、柔和で、すべての人に優しい態度を示す者とならせなさい。」**とある通りです。

「自制」：欲望や感情を抑えることができる人です。

このように一つ一つのことを見てきましたが、神があなたにしようとしていること、あなたに与えられた神のすばらしい祝福を見て、今の自分と神が変えようとしておられる姿には非常な開きがあることが分かります。私たちはすべてにおいて不完全です。いろいろなことで心配し思い煩い、すぐに間違っ

たことを言ってしまったり考えてしまったり行なってしまうようなどうしようもない者です。でも、神はこのような私たちを知ったうえで、こんな私たちを変えようとしてくださっているのです。最初に見たように、神はあなたを変えようとしておられます。では、なぜ変わらないのでしょう？神がどのような人物に私たちを変えようとしておられるのか見て来ました。そして、現実の自分を見たとき、そこには非常な開きがある、いったい何が問題なのか、なぜ、私たちは変わって来ないのかです。

◎なぜ、私たちは変わらないのか？

そのことを考えられたことがありますか？簡単に言うなら、問題は神があなたを変えようとしておられるのにそれを妨げているものがあることです。あなたが救われているクリスチャンなら、妨げの原因は罪です。（１）怠慢の罪です。自分の責任を果たそうとしないのです。神がやってくれるから私は何もしなくていい、みことばはただ聞くだけで終わってしまう、これでは何も変わってきません。私たちはみことばを聞くならそのみことばに対する責任が生じます。それに従うかどうか、それを実践して行くかどうかの責任です。多くの人たちはただ聞くだけで何もしないから何も起こって来ません。その怠惰の責任は何もしない私たちにあるのです。神のみことばを聞いてそれを私は行ないたくないと思っている人がいるなら、その人は自分の信仰をもう一度確認しなければいけません。なぜなら、神によって贖われた人は神に従って行きたいという思いを神がくださっているからです。私たちは大きな責任を負っていることを忘れてはいけません。（２）過信、二つ目に考えられる原因は過信です。神の助けによってではなく、自分の力で自分の努力ですべてしようとする人です。確かに、私たちはそのように育ってきました。何かにつけて「がんばりなさい！」、中途半端で投げ出さないで最後まで「がんばりなさい」と言われそのように生きて来ました。その思い、その生き方を信仰生活に持ち込んで、神の言われることを自分の力で一生懸命まじめにしようとするのです。でも、そのうちに気づくことは「だめだ、できない、」、そして、自分はだめな信者だと思い始めるのです。いつまで経っても行ないが変わってこない、私はだめな信者だと…。

◎行ないの伴った信仰者になるために必要なこと

先ず、神の命令を知ることです。神が何を望んでおられるのかを知ることです。二つ目に、その命令に従って生きることを決心することです。神さま、そのように生きて行きたいですと。そして、三つ目に、神の助け、恵みをいただきながら実際に歩み始めることが必要なのです。実際に歩み始めることがなければ、目的地に到達することはありません。当然のことです。何もしないでは何も変わらないだけではりません。却って、その信仰も弱って来るのです。そして、実際に歩み始めるためには聖霊なる神の助けが必要です。ですから、ガラテヤ５：２２を見たとき「しかし、実は」ではなく**「しかし、御霊の実は、…」**と書かれているのです。なぜなら、これらは**「御霊」**が生み出して行くものだからです。私たちの努力によってではありません。神の働きなのです。

（１）私たちはキリストが望んでおられるような信仰者になりたいと願うこと。

神さま、私はあなたを喜ばせるような信仰者になりたいし、あなたの栄光を現わす者になって行きたいと、そのことを願うことです。そして、

（２）そのような者に変えてくださる神の助けをいただきながら歩み続けて行くこと。

ガラテヤ５：１６を見てください。**「私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。」**と、罪に打ち勝つために私たちは御霊によって歩み続けて行くことが必要なのです。ですから、**「歩みなさい」**と現在形の命令なのです。自分の好き勝手な生き方から解放されて行くために、罪の生活に打ち勝つ秘訣は、聖霊によって継続して歩み続けて行くことです。同じ２４節を見てください。**「キリスト・イエスにつく者は、自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまったのです。」**と、つまり、ここで言っていることはイエスを信じている者たちは**「自分の肉を、さまざまの情欲や欲望とともに、十字架につけてしまった」**と、これまで自分の心を支配していた罪、放縦、これらによってもう自分は支配され続けることを許さないということです。そのように決心するのです。そして、２５節**「もし私たちが御霊によって生きるのなら、御霊に導かれて、進もうではありませんか。」**、ここでは軍隊用語が用いられています。聖霊によって隊列を守って進むとか、聖霊の指揮に合わせて歩調をとって行くという意味です。このように、聖霊なる神の指揮に従って歩み続けて行くのです。

みことばが私たちに教えてくれることは、私たちがこの世にあって変わって行くためには神の助けが必要だということ、そして、その助けをいただくためにはまず、私たちがそのことを望むことです。私たちがそれを妨げる罪に自分の心が支配されないようにすることです。多くの人たちはそのような責任をまったく無視して、自分が変わらないことを嘆いているのです。神は変えて行ってくださるのです。あなた自身の歩みを妨げるその罪を神の前に告白することです。ジョン・マッカーサー先生は「御霊によって歩む人生はイエス・キリストのような人生である。信者の考えが真理、愛、主の栄光によって浸透され、すべての点において主のようになりたいとの願いをもって生きること。御霊によって歩む人生

とは主イエス・キリストの教えと模範を真似た人生である。」と言っています。あなたも主に仕える人として、ことばだけでなく生き方をもってこのキリストのすばらしさを世に証して行くことが必要なのです。問題は神の教えに従って行くかどうかです。クリスチャンである皆さん、この世の中にあって、この国にあって、まだまだ多くの人々がキリストに逆らい続けています。私たちの愛する家族の中に、友人の中に…。神は使ってくださいます。あなたのことばをあなたの生き方を…。だから、神の前にどうぞ私を変えて続けてください、あなたに仕える者として、あなたの栄光を現わす者として、そして、どうぞ、みこころのままに私を使ってくださいと願うのです。その決心をもって、神の約束を信じて、この世に証し続けて行きましょう。